

—第6回平城京展—

古代の大和

—奈良県内市町村の発掘成果より—

昭和 63 年 11 月

主催 奈良市教育委員会

例　　言

1. この冊子は第6回平城京展「古代の大和」—奈良県内市町村の発掘成果よりーの解説パンフレットである。
2. この展示会は昭和63年11月3日㈭から11月13日㈰まで、奈良市史跡文化センター展示ホールで開催する。
3. 開催にあたっては、天理市・大和郡山市・桜井市・橿原市・御所市・平群町・田原本町・香芝町・広陵町・橿原町・明日香村（順不同）の各教育委員会に格別のご協力を賜った感謝いたします。
4. 企画から開催までの間、奈良県内市町村の埋蔵文化財担当者のあつまりである奈良県内市町村埋蔵文化財技術担当者連絡協議会のご協力があった。
また、このパンフレットの原稿執筆も各調査の担当者によるものであり下記の方々にご協力いただいた。
泉　武・井上義光・北村憲彦・阪口俊幸
佐藤良二・清水貞一・服部伊久男・藤田和尊・藤田三郎・村社仁史・柳沢一宏・山川均（五十音順）
5. このパンフレットは奈良市埋蔵文化財調査センターが作成した。

開催にあたって

例年、この季節に催しております埋蔵文化財の展示会も本年で第6回を迎えることになりました。本市に残る古代の文物の生みの母ともいすべき奈良時代の都、平城京に因み「平城京展」と称して、毎年の調査成果をご覧いただいてきたところでございます。

本年は、この平城京城を出て広く奈良県内に残された遺跡の調査成果を含めてご覧願いたいと考えております。

わが奈良県内にはじめて人間が生活の痕跡を残したのははるか旧石器時代のことであり、以来、今に至るまで人間の営みは絶えることなく続いているのでございます。この人間の営みの痕跡を遺跡といい、その実態を究明する作業が発掘調査なのであります。こうした発掘調査はひとり私共のみならず、奈良県内市町村の各教育委員会におかれましてもたゆまず行なわれているところでございます。

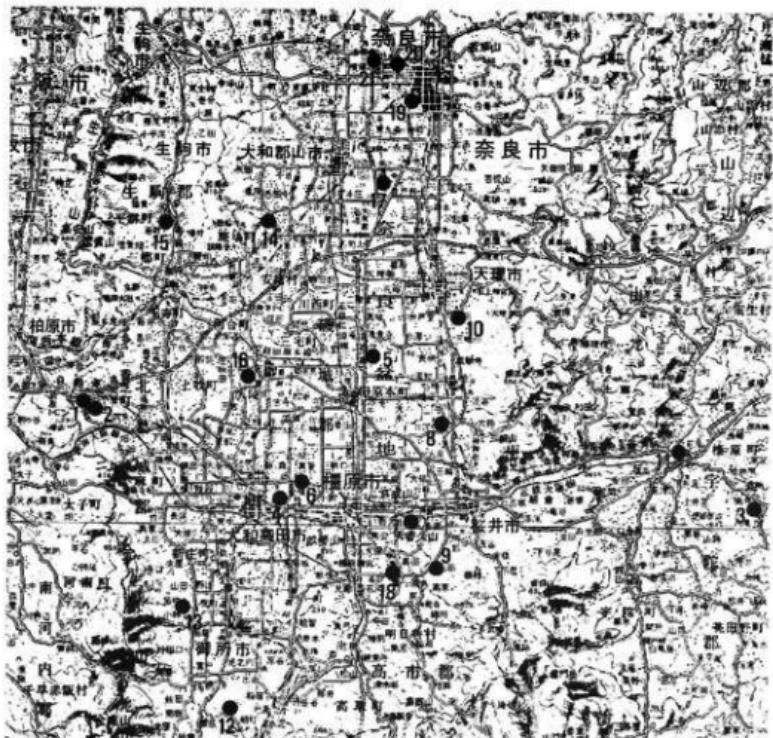
今回、県内市町村教育委員会の発掘調査の成果を一部ではございますが展示し、皆様にご覧いただくことにより文化財に対する理解を深めていただくと同時に、私共の果たしております役割をご理解願い、ご指導賜ることができますならば、まことに幸いでございます。

最後になりましたが、今回ご協力を賜った各教育委員会の皆様に厚くお礼申し上げ、ごあいさつといたします。

昭和63年11月

奈良市教育委員会

教育長 久保田 正一



- | | | | |
|--------------------|-----------|---------------------|-----------|
| 1. 桜ヶ丘第1地点遺跡 |(1) | 12. 巨勢山古墳群（巨勢山三十号墳） |(11) |
| 2. 鶴峰莊第1地点遺跡 |(1) | 13. 小林遺跡（小林櫻ノ木一號墳） |(11) |
| 3. 高井遺跡 |(2) | 14. 菩提山遺跡 |(12) |
| 4. 曲川遺跡 |(3) | 15. 安養寺瓦窯跡 |(13) |
| 5. 唐古・鍵遺跡 |(4) | 16. 寺戸廃寺跡 |(13) |
| 6. 中曾司遺跡 |(5) | 17. 美濃庄遺跡 |(14) |
| 7. 吉備遺跡 |(6) | 18. 雷丘東方遺跡 |(15) |
| 8. 繩向遺跡 |(7) | 19. 平城京左京五条五坊十坪跡 |(16) |
| 9. 南山古墳群（南山四号墳） |(8) | 20. 平城京左京二条四坊二坪跡 |(16) |
| 10. 星塚一・二号墳 |(9) | 21. 平城京左京二条二坊 | |
| 11. 神木坂古墳群（神木坂一号墳） |(10) | 十一・十四坪境小路跡 |(17) |
- * 遺跡名の前のゴチック数字は地図中の番号を、()内の数字はページを示す。

桜ヶ丘第1地点・鶴峰荘第1地点遺跡

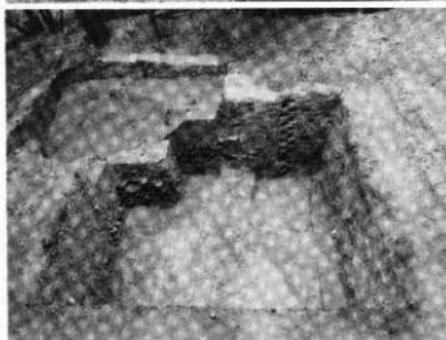
北葛城郡香芝町大字穴虫小字赤土平・同小字十丈坊 香芝町教育委員会

桜ヶ丘第1地点遺跡は、標高70mの舌状台地上に立地する後期旧石器時代の遺跡。1975年以来6回の発掘調査で約2万年前ごろの石器や石片が多数出土した。翼状剣片、国府型ナイフ形石器などがあり、瀬戸内技法という石器製作法でつくられ、国府石器群と呼ばれている。石材は、ほとんどサヌカイトである。奈良県はもとより近畿地方でも有数の遺跡である。

また鶴峰荘第1地点遺跡も後期旧石器時代の遺跡である。標高約90mの丘陵先端部に立地し、1984・85年の発掘調査で今から約1万8000年前ごろに掘られたサヌカイトの採掘坑が発見され、中から瀬戸内技法でつくられた石片が多数出土した。桜ヶ丘第1地点、田尻峠第2地点遺跡とともに、香芝町から大阪府羽曳野市、太子町にかけて分布する石器時代の二上山北麓遺跡群を代表する遺跡である。



▲ 遺跡の位置



▲ 桜ヶ丘第1地点遺跡遺物出土状況

▲ 鶴峰荘第1地点遺跡発掘区全景

高井遺跡

宇陀郡株原町高井 棚原町教育委員会

株原町内を北西に流れる内牧川の流域には縄文時代から中世に至るいくつかの遺跡がある。高井遺跡もそのひとつで、内牧川中流の右岸、河岸段丘上にある。

この地域では場整備が行なわれることになったので発掘調査を行なったところ、縄文時代から中世にわたる複合遺跡であることがわかった。縄文時代の遺構には竪穴式住居跡、土坑がある。土坑の中には底部穿孔か底部を打ち欠いた深鉢が出土したものが4基あり、墓かとも考えられる。奈良時代の遺構には竪穴式住居跡3棟とピットがある。住居跡はいずれも平面が方形で、うち2棟にはカマドがある。中世の遺構には素掘溝、土坑、掘立柱建物6棟がある。

这样に縄文時代から中世にわたる遺構が検出されたが、なかでも縄文時代の遺構、遺物が最も多い、縄文時代早期から前期、中期、後期と断続的に営まれた集落であることがわかる。県内でも数少ない母集落のひとつであったと考えられよう。



▲ 遺跡の位置



▲ 発掘区全景

▲ 縄文土器出土状況

曲川遺跡

樺原市曲川町・新堂町 樺原市教育委員会



▲ 遺跡の位置



曲川遺跡は樺原市の中西部、葛城川と曾我川とにはさまれた低地に立地する南北約650m、東西約400mの範囲をもつ遺跡である。従来は古墳時代初頭の遺跡として知られていたものの、この時期の中心が大半を占める池部分にあると思われるため詳細は不明である。

最近の調査の結果、さらに縄文時代晚期の土器棺墓群、古墳時代中期の方形周溝造構、平安時代後半から鎌倉時代に至る居館跡等が新たに発見されている。

遺跡全景（航空写真）▲
土器棺墓発掘状況 ▲

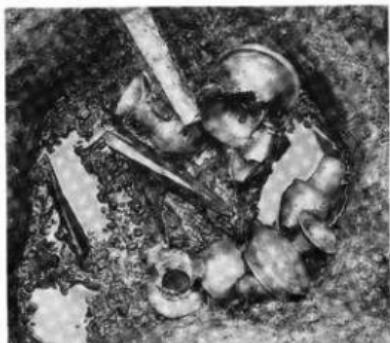
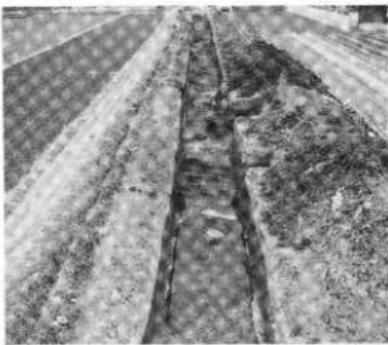
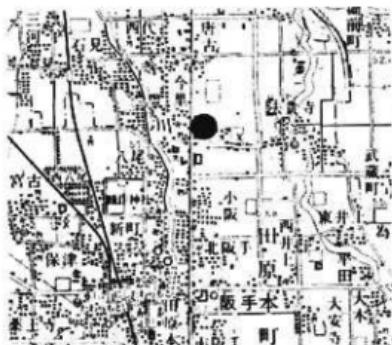
唐古・鍵遺跡

穂城郡田原本町大字唐古・鍵 田原本町教育委員会

唐古・鍵遺跡は奈良盆地中央部に位置する弥生時代の代表的な農耕集落跡である。すでに36次におよぶ発掘調査がおこなわれ、ムラの全容がわかりつつある。

ムラは径400mの範囲の居住区と、その外側に幅150~200mの数条の環濠をめぐらせた環濠帯より成っている。居住区では高床倉庫、竪穴式住居、井戸、木器貯蔵穴、区画溝などを検出している。井戸には多量の土器が供献されたり、また、木器貯蔵穴では製作途中の鎧や鋸などがそのまま放置されているのが見つかっている。

この他、銅鐸の鋳型や鶴頭形土製品、鞘入り石劍、巴形銅器、銅矛など類例の少ない重要遺物も多数出土している。



唐古・鍵遺跡

- ◀ 遺跡の位置
- ▲ 発掘区全景
- ◆ 土器群発掘状況

中曾司遺跡

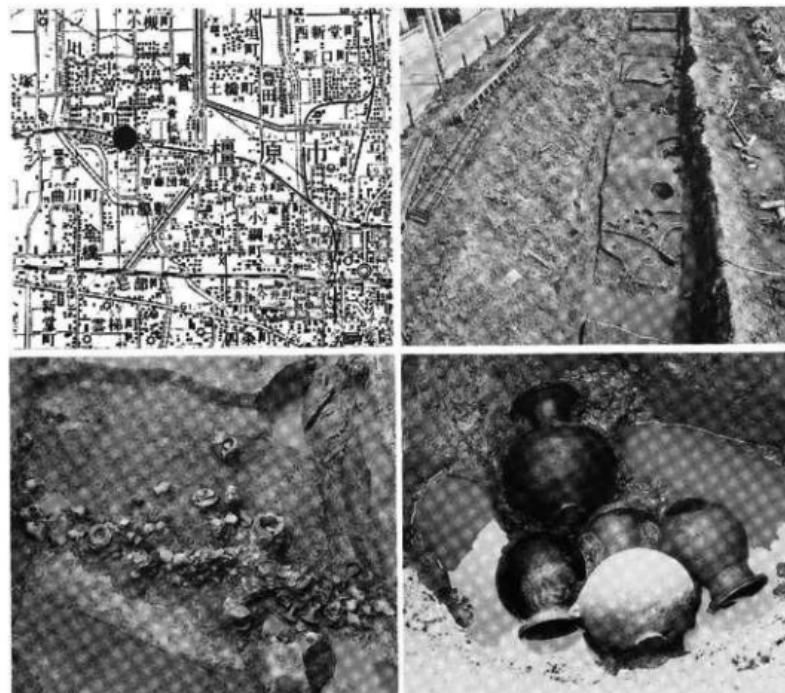
- ◀ 遺跡の位置
- ▶ 発掘区全景
- ◀ 土器群検出状況
- ▶ 土塙発掘状況

中曾司遺跡 丁角地区

権原市中曾司町・曾我町 権原市教育委員会

曾我川右岸に立地する、弥生時代の各時期にわたる集落跡である。周辺には同じく弥生時代の土橋遺跡や玉造工房あとで知られる曾我遺跡がある。宗我坐宗我都比古神社を中心に古くから豊富な遺物が出土している。しかし、近年調査件数が増加しているとはいえまだ情報が少なく、環濠、住居跡など集落の状況を詳しく知ることはできない。最近の調査では古墳時代の埴輪列、中世の井戸など弥生時代以外の遺物、遺構の発見も相次いでいる。

この遺跡の丁角地区では、弥生時代中・後期、古墳時代中期の溝を検出し、それぞれから多量の遺物が出土した。このうち弥生時代中期の溝からは、家屋文土器が出土した。類例は全国で18例あり、うち唐古遺跡で8例が知られるが、竪穴式、寄棟風、切妻風の3種の建物が描かれたものは初出である。中央に竪穴式住居を太い線刻で描き、左に寄棟風建物、右に寄棟風と切妻風建物の輪郭を細い線刻で、骨組みと屋根を網目で簡潔に表現している。



吉備遺跡 岡崎地区

桜井市吉備 桜井市教育委員会

吉備遺跡は、桜井市の南西部で、米川と寺川との間の沖積平野上に位置している。岡崎地区での発掘調査で、大きく S 字に蛇行する自然河道を検出した。河道内から、弥生時代後期中葉を前後する頃の土器が多量に出土し、また農耕具等の木器、トチ、ヒョウタン等の自然遺物もあり、近くの集落での生活の営みを再現させる遺物を多く得た。

出土した土器は、記号文様を持つ長頸壺を中心に、装飾性は乏しいものの、実用性に富んだ器種、器形が多い。木器には平歛、斧柄、木庖丁などがあり、特に木庖丁は日本最大のものが出土している。

弥生時代の終り頃の、村落の生活が良くわかる遺構、遺物である。



▲ 遺跡の位置



▲ 遺跡全景（航空写真）
▲ 土器群検出状況

縦向遺跡 南飛塚地区

桜井市縦向 桜井市教育委員会

縦向遺跡は、桜井市の北部で、三輪山の北西に位置する。巻向川の旧河道による扇状地上に、東西1km、南北1kmにわたって広がっている。南飛塚地区はその南西の一画あたり、石塚古墳の南0.4kmのところにある。

発掘調査で、U字状に大きくカーブする、幅9mの溝が発見された。溝内には、建物の壁材や棟材とみられる建築部材と、祭祀に用いたとみられる土器や木器が出土した。これらの出土状況からみて、一棟の家屋の部材が投入された可能性がある。出土した土器から、これらの遺物は古墳時代前期のものとみられる。この時期は、ちょうど縦向遺跡の盛期と重なるため、注目される遺構、遺物である。



▲ 遺跡の位置



▲ 発掘区全景

▲ 建築部材出土状況



南山古墳群 南山四号墳

権原市南山町 権原市教育委員会

南山古墳群は、大和三山の天香久山の東南、古代の磐余の地にある。粘土被を埋葬主体とする五号墳、陶質土器や鉄艇を副葬する四号墳、木棺直葬の一~三号墳など多彩な古墳群である。

この古墳群中の四号墳では、主体部は盗掘を受けていたが、その南側に主軸を交える形で設けられた副施設から武器（鎌・槍）、馬具（轡・革金具）、鉈などの鉄製品、用途不明の銅製品等が納められていた。さらに墳頂部からは陶質土器3点が出土している。いずれも原位置ではないものの、集中して出土したことから、墳丘上祭祀に伴う供献品と思われる。半島からの渡来系の被葬者を考えることができる。

陶質土器3点のうちの1点脚台付動物形角杯は、4方向2段菱型透かしをもつ幅広がりの脚台に方形の板を置き、その上に四脚の動物を配したもので、この動物の背中に角杯と呼ばれる器が1個装着される。類例は朝鮮半島南部の伽耶地域で5点発見されているだけである。半島外では初めての例で、しかも既知の例が由来の不分明なものであることから、発掘調査で発見された唯一の例として貴重である。残念ながら動物が何であるかは不明である。

▲ 遺跡全影（航空写真）

▲ 発掘区全景



▲ 遺跡の位置



星塚一・二号墳

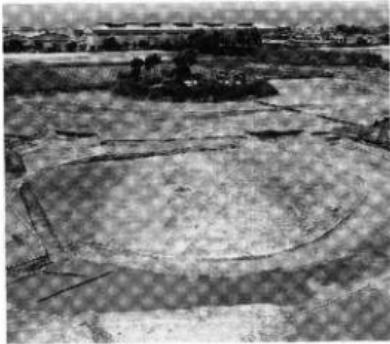
天理市二階堂上之庄町 天理市教育委員会

一号墳と二号墳は接近していて、ともに周濠をもつ前方後円墳であり、二号墳は内・外の二重周濠を有していることが明らかになった。

このうち、一号墳は、全長38m、後円部直径27mあり、墳丘は削平されていたが、周濠内から、土器類、埴輪、木製品など多量に出土した。須恵器では、筒形器台や甕は陶質土器と推定され、木製品では笛状木製品や琴状木製品などの楽器と考えられるものも出土した。笛状木製品は、我が国では出土例がなく、貴重な資料である。



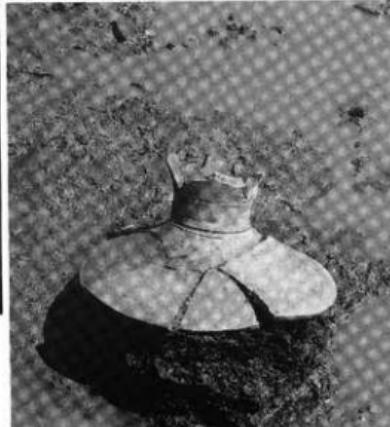
▲ 遺跡の位置



▲ 発掘区全景



▲ 横笛（レントゲン写真）



▲ 土器出土状況

神木坂古墳群 神木坂一号墳

宇陀郡棟原町荻原・下井足 棟原町教育委員会

神木坂古墳群は近鉄棟原駅北側の尾根上にある、古墳3基と1基の古墳状隆起からなる古墳群で、すぐ北には古墳時代前期末頃の古墳である谷畠古墳がある。この古墳群のうち一号墳は尾根の先端にある径16mの円墳で、4基の木棺が直接埋葬されていた。これらの埋葬施設からは水晶製切子玉、琥珀製畫玉、須恵器、土師器、鐵釘、鐵刀子、鐵鎌、鐵刀などが出土しており、6世紀前半に相ついで埋葬されたと考えられる。

この古墳のすぐ南には6基の土壙墓と呼ばれる墳丘をもたない墓がある。何点かの土器が出土しており、これらも一号墳と同じ頃につくられたことがわかる。

二号墳は一辺約15mの方墳、三号墳は径8mほどの円墳かと思われ、いずれも横穴式石室が築かれていた。二号墳の石室は棟原石を積んだ磚砌石室であるが、何回もの盗掘であらされ、鐵釘、須恵器、土師器、金環が残されていたにすぎない。三号墳も盗掘がひどく、盛土は削られ、石室の石材も抜き取られており、数点の須恵器、土師器、2点の鐵釘のみが出土した。いずれも7世紀中頃に築造されたものであろう。

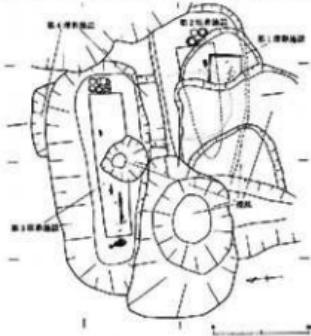


▲ 遺跡の位置



▲ 遺跡全景（航空写真）

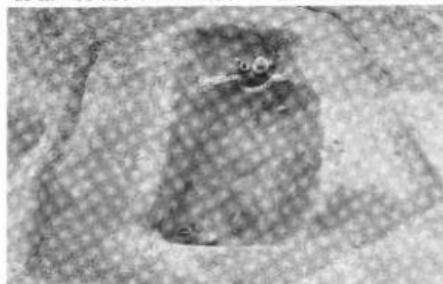
▲ 一号墳主体部検出図



巨勢山古墳群 三十号墳

御所市朝町 御所市教育委員会

総数約800基によって構成される我が国最大級の群集墳である。5世紀前葉、南葛城地域最大の前方後円墳、室・宮山古墳が築造されるのを契機として、その背後の丘陵地に同古墳を見おろすようにしてこの古墳群は形成されていく。群形成のピークは6世紀中葉にあるが、7世紀に入ると新たに築造される古墳は大幅に減少し、横口式石槨を内部主体とする方墳も7世紀中葉に築造されて、古墳時代も終焉をむかえる。



小林遺跡 小林櫻ノ木一号墳

御所市小林 御所市教育委員会

小林遺跡は、従来遺跡地図にも登載されていなかった遺跡であるが、発掘調査によって縄文時代の石器製作場かと思われる溝やピット群、弥生時代の方形周溝墓、円墳を検出し、縄文時代から古墳時代までの複合遺跡であることがわかった。

小林櫻ノ木一号墳 小林遺跡で新たに検出した径11mの円墳。墳丘はすでに削られてしまっている。右片袖式の横穴式石室の中に木棺が2棺並列されていたことがわかるが、石室の石材はすべて取り去られている。一方の木棺から銀製釦子(カンザシ)とその飾り玉が出土した。6世紀前半の古墳かと思われる。

- ▲ 巨勢山三十号墳主体部
- ▲ 小林櫻ノ木一号墳主体部



菩提山遺跡

大和郡山市出屋敷他 大和郡山市教育委員会

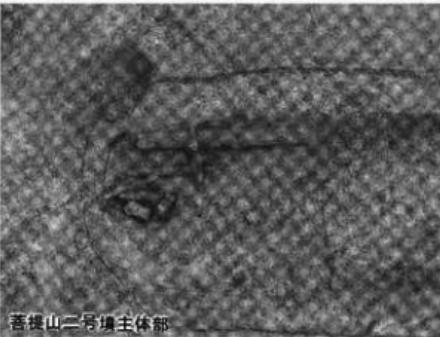
遺跡の場所は、大和郡山市の西部、斑鳩町との境界に近いところで、有名な法起寺の北東500mの地点である。この遺跡は、以前から弥生式土器やサヌカイト片の濃厚な散布地として知られており、調査の結果、弥生時代から奈良時代にわたる複合遺跡であることが判明した。

菩提山一号墳 周溝心々径約18mの円墳で、埋葬施設や墳丘はすでに削り取られていた。幅2~4m、深さ0.2~0.5mの周溝だけが残り、その中から蓋形埴輪や円筒埴輪がたくさん出土した。円筒埴輪の中には、記号文を描いたものもたくさんあった。埴輪の特徴から5世紀後半頃に築造されたと考えられる。

菩提山二号墳 周溝心々辺約12mの方墳で、幅1~2mの浅い周溝が廻っている。墳丘は削平されていたが、埋葬施設がかろうじて残っていた。長さ約3.3mの割竹形木棺を直葬しており、東小口部に刀、刀子、鏟、鎌などの鉄器が副葬されていた。1号墳とさほど隔たらない時期に築造されたものと思われる。

3号竪穴式住居・4号竪穴式住居 3

号住居跡は、一辺約5.4mの方形住居で、主柱穴は4個ある。4号住居は、3号住居の後につくられたもので、一辺約4.5mの方形住居である。主柱は3号住居と同じ構造をもち、床面から古墳時代前期の壺、高杯などが出土している。



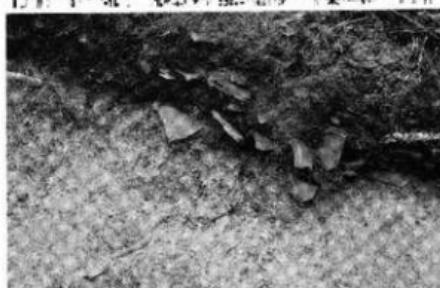
菩提山二号墳主体部

安養寺瓦窯跡

生駒郡平群町下垣内 平群町
教育委員会

平群町の中央部、竜田川西岸近くにあ
る日山丘陵の東斜面を利用した瓦窯跡
である。以前、安養寺の墓地造成に伴い
2基の登り窯が発見され、出土した軒瓦
の文様より藤原宮の屋瓦を焼いているこ
とが確認された。7世紀末頃の瓦窯跡
で、輸送は竜田川の水運を利用したと考
えられる。

現在、土砂崩れにより埋没している
が、複弁八葉の軒丸瓦と扁行唐草文の軒
平瓦の出土が知られている。



寺戸廃寺跡

北葛城郡広陵町寺戸 広陵町
教育委員会

広陵町寺戸の集落の西方、下池から続
く水路で、飛鳥～奈良時代の瓦が採集で
きることは從来から知られており、寺院
が営まれていた可能性が指摘されている。

この水路の改修時の発掘調査では、小
範囲の発掘にもかかわらず多量の瓦が出
土し、地形が瓦窯を営むのにふさわしい
ことと、瓦が黒色の炭化物層から出土し
たことから、発掘地は瓦窯跡の一部であ
るとと思われた。しかし、窯体が検出でき
ず、焼き歪んだ瓦もないことから寺院の
一画である可能性も否定できない。

- ▲ 安養寺瓦窯跡の位置
- ▲ 遺跡全景
- ▲ 寺戸廃寺跡の位置
- ▲ 瓦出土状況

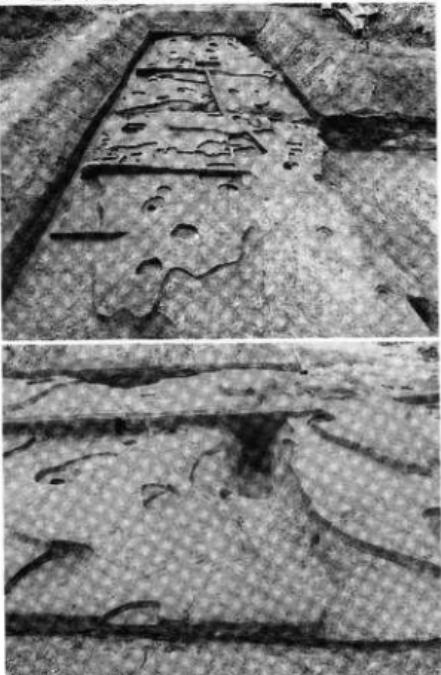
美濃庄遺跡

大和郡山市美濃庄村他 大和郡山市教育委員会

美濃庄遺跡は、弥生時代前期から鎌倉時代に至る大複合遺跡である。1987年に実施した発掘調査では、奈良時代の人工河川や弥生時代前期の溝、古墳時代後期の掘立柱建物を検出し、遺跡の重要さを垣間見ることができた。中でも奈良時代の人工河川は、平城京の排水を担う人工流路であり、墨書き工器、土馬、ミニチュアカマド、灰釉陶器、銭貨（神功開宝）など、平城京の時代の遺物が多数出土し、注目される。



▲ 遺跡の位置



▲ 発掘区全景

▲ 造構検出状況

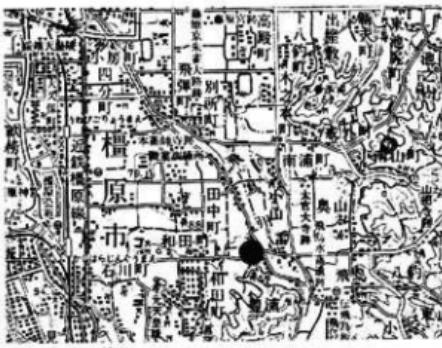
雷丘東方遺跡

高市郡明日香村 明日香村教育委員会

明日香村教育委員会が、昭和62年7月、雷丘東方遺跡の発掘調査を実施したところ、平安時代初頭の井戸から「小治田宮」と書かれた多数の墨書き土器が出土した。

文献の記載では、推古十一（603）年に推古天皇が造営した「小墾田宮」と天平宝字四（760）年に淳仁天皇が平城宮から行幸した「小治田宮」の二つの「おはりだのみや」が知られる。今回出土した土器に書かれた「小治田宮」は、後者との奈良時代における小治田宮を指すものであろう。このことから、今回出土の井戸やその周辺で検出している掘立柱建物が小治田宮に関わる施設であったことが推測される。

これまで、飛鳥で宮地が確定した例はない。小治田銘墨書き土器の出土が宮地比定に果たす役割は非常に大きく、ひいては飛鳥の宮都研究上の一指針ともなりうるべき成果であろう。

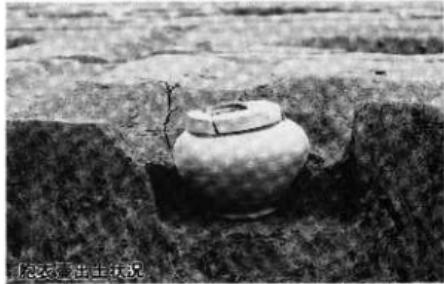
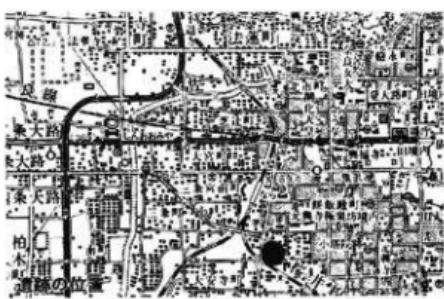


▲ 遺跡の位置



▲ 墨書き土器出土井戸

▲ 墨書き土器出土状況



平城京 左京五条五坊十坪跡

奈良市西木辻町 奈良市教育委員会

この遺跡の発掘調査では胎衣壺かと思われる壺が出土した。かつて、男子が誕生すると、その子の出世を願って胎衣（胎盤）を錢や筆、墨とともに壺に納め埋納するという風習があったとされ、今回の出土例では和同開珎が5枚納められていた。こうした壺を埋納した例は平城京内でもいくつか知られており、錢とともに筆、墨が納められていた右京五条四坊三坪（現在の京西中学校）の出土例は著名である。しかし、いずれの例も胎衣そのものは残っておらず、そうした風習が奈良時代まで遡ることを確かめるために、今回出土した壺の中の成分を科学分析している。

平城京 左京二条四坊二坪跡

奈良市法蓮町 奈良市教育委員会

この遺跡の発掘調査で奈良時代の邸宅跡とともに平安時代末～鎌倉時代初め頃の構造を検出し、その中の井戸跡から鉄製の馬具が出土した。出土したのは轡と呼ばれる部分で、馬の口にかませる衡と、その脱落を防ぐ鏡板、鏡板を馬の頭に固定するための革帶を取りつける立間、手綱がとりつく引手から成っている。今回の例は引手が欠落しているが、遺存状態はよく、鏡板の形が杏葉に似ていることから杏葉轡とも呼ばれる。この時期の馬具の出土例は少なく貴重な例となった。

平城京 左京二条二坊十一・十四坪境小路跡

奈良市法華寺町 奈良市教育委員会

この遺跡は平城宮の東方、法華寺の南方いずれも150mほどと平城京内での好位置を占め、京の条坊区画では左京二条二坊のうち十一坪と十四坪を両す小路に相当する地点である。

発掘調査で道路、溝、橋脚、土塁を検出した。このうち道路は十一坪と十四坪境の小路である。小路の東・西には側溝が掘られており、道路幅はこの側溝の心々で7.15mほどある。

小路側溝からは土器、瓦、金属製品と多量の木質遺物が出土した。木質遺物の中には数十点の木筒片、簷串、独楽、櫛のほかに骰子（さいころ）の一種かとも考えられる木製品がある。

これは、六角柱の両端を六角錐に削った小型の木製品で、全長は4.1cm、幅は2.0cmある。寸づまりの鉛筆の両端を削ったような形である。角柱部の三面に「三」・「五」・「一」の墨書がある。他の三面には墨書は確認できない。このような木製品は他に類例がなく、用途を知ることはむつかしいが、小型の木製品であること、六角柱であること、柱の各面に数字が記入されていることを考えあわせると骰子（さいころ）の一種であることも考えられよう。

▲ 発掘区全景

▲ 骰子状木製品（赤外線写真）

